



Title	第1回大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウムについて
Author(s)	竹村, 景子
Citation	EX ORIENTE. 2025, 29, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎特集 言葉を究めて世界へはばたく

—第1回大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウム講演録—

第1回大阪大学外国語学部・外国学専攻 シンポジウムについて

竹村景子

2023年10月21日（土）、箕面市立文化芸能劇場大ホールにて第1回大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウムが開催された。コロナ禍のために実現までずいぶん時間がかかったが、2021年4月のキャンパス移転から2年半越しの念願達成であった。

箕面市間谷地区から同市船場東地区に移転し、「山の中のキャンパス」から「街中のキャンパス」へと変貌するにあたり、外国語や外国学、地域研究といった学問についての大々的なシンポジウムができないだろうか、街中に移転すれば集客も見込めるのではないだろうかと考えていた。移転の数年前から「マンスリー多文化サロン」を中心に地域の市民向けの講座等が好評を博していた上、学生主体で開催する夏まつりや語劇祭などにも多くの地域住民の参加があった。ただ、もっとアカデミックな議論を学部生や大学院生、一般の来場者に聴いてもらいたいという願いがあった。それは、新しい箕面キャンパスが大阪大学の中で「OUGC（Osaka University Global Campus）」という象徴的な名称で呼ばれることとなり、地域に開かれたキャンパス、世界と地域とを結ぶ場となることが期待されたからでもある。

かくして、第1回目のシンポジウムを開催すべく、箕面キャンパスを挙げて

準備に取り掛かった。最重要事項は「基調講演者としてどなたにお出でいただくか」であった。シンポジウムのテーマについては、記念すべき初回ということで外国語学部のもットーである「言葉を究めて世界へはばたく」に決まった。そのテーマにふさわしいお話をしていただけると確信し、山極壽一先生とウスビ・サコ先生に基調講演者としてお出でいただけないか打診させていただいたところ、幸いにもご快諾いただけたのである。

お二人とも大変著名な研究者でいらっしゃるの、ここで詳しくご紹介するまでもないと思われるが、なぜ「言葉を究めて世界へはばたく」というテーマにお二人がふさわしいと判断したのかについての言及しよう。

周知の通り、山極先生は霊長類（ゴリラ）研究の世界的な第一人者である。長くアフリカ大陸で調査研究を行ってこられたが、そのアフリカ大陸のほとんどの国は「多言語・多民族社会」である。現地での人びととの交流、そして、ゴリラとの交流を経験してこられた山極先生であれば、社会における「ことば」の役割やあり方について言語学や文学の専門家とは違った視点でのご意見をお持ちであるはずで、それを参加者のみなさんに是非聴いていただきたいという意図があった。

サコ先生は西アフリカのマリ共和国のご出身で、ご自身の生まれ持った言語以外に日本語を含む複数の言語を駆使して様々な発信をしておられる研究者である。マリにおられた時から、第一言語だけではなく地域の共通語、そして旧宗主国語のフランス語を使っておられ、中国に留学された経験から中国語も話し、さらに日本に留学されて日本語も習得された。英語は言うに及ばずである。このようにマルチリンガルな方が「ことば」を使うことに対してどのような意見をお持ちされるか、それを参加者のみなさんに知っていただきたいという意図があった。

この後に続くお二人の基調講演録を読んでいただければ、当日のシンポジウムがいかに刺激的なものであったかがわかっていただけるだろう。50分ずつのご講演であったが、もっと長く聴いていたいと思える内容であったし、もっと多くの外国語学部の学生たちに聴いてもらえたらよかったのと思える、大

変示唆に富んだお話が盛り込まれていた。残念ながら参加できなかったという人には、この講演録を是非熟読していただきたい。

なお、この第1回シンポジウムは「大阪大学大学院人文学研究科附属複言語・複文化共存社会研究センター（阪大ふくふくセンター；以下センター）」の設立記念を兼ねたものでもあった。山極先生とサコ先生の基調講演が第1部であり、第2部ではセンターの紹介も兼ねたパネルディスカッションを行った。パネリストとして、センターにおいて中心的に活動しているフィリピン語の矢元貴美先生とベトナム語の近藤美佳先生、および、外国にルーツを持つ子どもたちの支援活動に携わってきた大阪外国語大学の卒業生1名と、人文学研究科と現外国語学部の在学生各1名に登壇してもらった。また、山極先生とサコ先生にはコメンテーターとして再びご登壇いただいた。

短い時間ではあったが、登壇者がそれぞれの活動経験とそれによって自らが得た学びについてしっかりと語ってくれた上、それぞれの語りに対して山極先生とサコ先生が非常に的確なコメントをして下さった。シンポジウム参加者に対して行ったアンケートでは、山極先生とサコ先生の基調講演に対する賛辞があったことはもちろん、パネルディスカッションに対する高い評価も多く見られた。センターの今後の活動に対する期待と応援の気持ちを表すコメントもあり、シンポジウムの開催によって一般の方々にもセンターの存在を強く印象付けることができたことを付言しておく。